#### 令和5年度の振り返りと今後の課題

#### ○新型コロナウイルス感染拡大防止対策

- ・新型コロナウイルス感染症の位置づけが、R5 年 5 月 8 日から「5 類感染症」となったことにより、遊び場の利用人数の制限解除、開所時間の変更、土日・祝日の予約制の解除等、子育て支援センターにおける様々な制限を緩和した。
- ・つどいや講座の内容も、ふれあい遊びやおしゃべりなど交流することで他者とつながりを感じられる内容を盛り込むよう にした。
- ・換気や手指消毒、おもちゃの消毒等、引き続き感染症対策を行っていく。

#### ○妊娠期から子育て期までの切れ目のない支援の構築

・妊産婦や乳幼児に関する相談を受ける「子育て世代包括支援センター」と児童虐待などに対応する「子ども家庭総合支援拠点」を統合し、一体的に相談支援を行う機関として令和 5 年 4 月に「こども家庭センター」が設置された。相談窓口が一本化されたことにより、支援が必要な家庭へのサポートがスムーズになった。また、来所や電話での相談件数が増え、R5.4~R5.9 月の相談件数は昨年度比 I 19%であった。保育所の入所申込がオンラインでできるようになった I 2 月以降は、相談件数が減少している。相談内容としては、保育所入所に関する相談に次いで大人自身の悩みに関することが増えている。丁寧に傾聴するとともに、必要な子育て支援サービスを紹介したり保健師、臨床心理士等の専門職へつなげたりし、早期支援による虐待予防に努めた。今後も、利用者主体でより適切な支援活動が行えるよう、利用者支援専門員としての専門性を身につけていきたい。

### ○こどもの遊び場「わいわいルーム」の開設

- ・R5 年 1~2 月にこども政策課が実施した「雨の日のおでかけ先などについてのアンケート」において、9 割の人が「松江市は雨の日でも遊べる施設が充実していると思わない」と回答している。また、子育て支援センターは 0~2 歳児用の遊具が多く、3~5 歳の幼児が身体を十分に動かして遊ぶスペースや遊具が少ない。そのため、こどもの遊び場の充実を図るため、R5 年 12 月より保健福祉総合センター2 階に「わいわいルーム」を開設した。
- ・土曜、祝日のみ(他の事業のある場合を除く)開所し、対象は未就学児(主に 3~5 歳児)とその保護者としている。
- ・遊びの内容は、すべり台、太鼓橋、跳び箱など運動遊具を使った身体を動かす遊びやストラックアウトなどのルールのある遊び、「親子ふれあいチャレンジ」として、道具を使わず親子でふれあいながら楽しめる遊びを提供した。
- ·R5 年度は、12~3 月の 4 か月 (全 16 回) で 448 組(1,266 人)の親子の利用があった。
- ・雨の日や夏の暑い日など、天候に関係なく親子で安心して遊べる場として今後も遊びの内容等を検討しながら行ってい きたい。

#### あいあい

#### ○交流事業・子育て学習会

- ・R5.4 月から母子手帳アプリ「母子モだんだん」からの参加予約に変更した。土日や夜間でも事業の予約ができ、予防接種管理などもできるため好評である。
- ・昨年度の利用者アンケートの結果を踏まえ、保護者同士が気軽におしゃべりをしながら情報交換や交流ができる内容として、子育て自主サークルと協働で「あいあいぼっくす」を新たに企画した。同じ悩みをもつ保護者同士で話をすることで、安心したり参考になったりし、子育てに前向きになることができる。また、子育て自主サークルが参加することで、より地域とつながりを感じることもできる。次年度はさらに内容を検討し、より参加しやすく楽しめる内容としていきたい。
- ・今年度は予約制、定員制で行ったが、コロナによる制限もなくなったため次年度はより多くの方に参加してもらえるよう、 一部の事業については予約不要としていく。

#### 〇保育所(園)の入所受付業務実施

・乳幼児健診やあいあいでのつどい等に参加し来所した際に保育所(園)への入所の相談をする保護者が多い。

- ・母子手帳交付時に母子保健コーディネーターが面談する中で、【産休時の上のこどもの保育所について】【育休明けに 保育所に入るには、いつ頃手続きをするのか】等保育所入所に関する質問が多く見受けられた。
- ·R6.4 月からオンラインによる入所申込ができるようになり、手続きの方法等、丁寧に対応した。

# おもちゃの広場

- ・コロナ 5 類移行後の利用制限や、土曜・日曜・祝日の予約制限の解除に伴い、利用人数が前年度の 2 倍に増加した。 家族と一緒に利用することでこどもの年齢層の幅も広がり、3歳以上のこどもや父親、祖父母の利用も増加した。家族と 過ごす安全な遊び場として、遊具の内容、種類、数の調整や配置など環境を整え、安心して過ごせるよう配慮した。また、 第一子を育てる初来所の親子が増え、リピーターに繋がっている。ホッとできるスペースや、くつろげる雰囲気をつくること で、自然に育児の悩みや子育ての情報交換ができ、母親のリフレッシュの場となっている。
- ・相談内容は、育児不安による関わり方、夜泣き、食事、発達の遅れなどの相談が多かった。一人ひとりの発達に応じた対応や、ケースに合った具体的な情報を提供しながら、身近な存在としてふれあい方を一緒に考え、育児力のサポートをした。継続的に見守ることで、母親の自信につながるよう励ましたり、勇気づけたりしながら安心感に繋げている。今後も日常的に親子とかかわる時間を大切にし、利用者主体の適切な支援ができるよう努めたい。
- ・子育て&子育て支援のための講座では、夫婦で共に考えるきっかけとなるよう子育て世代向けファイナンス講座や男性育児休業について取り上げた。まだ現実的には一般化されていない職場の現状を話題にしながら、男性目線での育児についても考え、育児参加に繋げていきたい。実際に育児休業を取得した父親からは、こどもの成長を身近に感じ、苦手意識を克服したなどの意見が聞かれた。家族の協力は、母親のワンオペ育児や、育児疲れ、産後の体調不良、孤独感などの精神的負担を和らげることにもなるため、家族で支え合えるような、適切な支援ができるよう気持ちに寄り添いながら、丁寧な対応を心がけたい。
- ・ファミリーサポートセンターやシルバー人材センターの託児サポート事業を利用する方が増え、多胎児育児家庭支援サービスや産後ケアについての問い合わせや照会も増えた。引き続き産前産後の負担軽減や、育児不安の解消に向けスムーズな支援となるよう各関係機関との連携を図りたい。また、地域のボランティアや登録サークルなどの協力も得ながら、親子や家族同士での関わりやふれあいの場を増やし、交流の機会を設けていきたい。

## 美保関子育て支援センター

- ・新型コロナウイルスが5類に移行し、子育て支援センターの利用方法も徐々に緩和されていった。午前中の離乳食や午前寝をすることで、利用を諦めることも多かった乳児の保護者は、1日を通してセンターが開所になったことで、時間を気にせず遊びに来ることが出来るようになった。子育て中の保護者にとって、個々の生活ペースに合わせて好きな時間に利用できることは、とても重要な要因のひとつだと改めて感じた。
- ・コロナ禍では親子でのふれあいを中心に楽しんできたつどいも、5月以降、「隣の方と手をつなぎましょう、みんなで輪になりましょう」など、参加した親子同士でのふれあいや交流を楽しむ内容も増やしていった。少しずつ親子同士での交流の場を増やしていったことで、仲間づくりのきっかけになることもあった。顔を合わせる機会が増え、親子同士の交流や情報交換の時間も増えた。今後も子育て中の保護者が孤育てすることなく、少しでも心穏やかな時間が持てるよう企画していきたい。
- ・これまでの親子の自由製作である「つくってあそぼう」は、家庭にある材料を活用してのおもちゃづくりや、家庭で経験しにくい絵の具やスタンプを使った内容で行っていた。今年度は初来所のきっかけのひとつになればと、「年を通じて足形手形アートでの作品作りを行った。月ごとに作品の仕上がりを変えることで、毎月製作しても楽しめるよう計画をした。その結果、事業の前年比で約5倍に増えた(令和4年度40組、令和5年度194組)。足形アートの製作をきっかけにリピーターになる親子もおり、美保関子育て支援センターに足を運んでもらうきっかけになる事業のひとつになった。

・相談内容の件数については前年度と比べて大きく変わりはないが、食事に関しての相談は前年度の3倍になっている。内容としては離乳食など食事を食べてくれない、噛まずに丸呑みする、離乳食が思うように進まないなど様々である。近年日中の気温の高い日が多いためか、水分補給の方法などについての相談も多い。離乳食の試食等の事業の開催している施設等も増えてきているので、参加を促しながら、保護者の不安やストレスの軽減に繋げていきたい。

## たまゆつどいの広場

- ・5月8日から新型コロナウイルス感染症が5類相当となり、あそび場の利用人数制限がなくなった。また、6 月以降、民生児童委員の参加や子育てサークル"気まま部"が講座やつどいのお手伝いに参加してくださるようになった。
- ・8月末でサン・エールたまゆから旧玉湯小学校の児童クラブ跡地に移転した。広い遊び場を気に入ってくださる方も多く 移転を惜しむ声もあったが、より利用者と距離が近くなり、親しみやすい雰囲気を喜んでくれる利用者が少しずつ増えていった。今後も利用者のニーズに合わせて遊び場の環境や支援の在り方を考えていきたい。
- ・講座やつどいは部屋の広さ、駐車場の台数を考え利用人数を制限した。講座の内容によっては、旧玉湯小学校のパソコン室を借りて行った。今年度のパソコン室利用は2回だったが、準備、片づけ等の課題があった。来年度以降も内容によってはパソコン室を借りて開催になるものもある為、開催方法が課題となっている。
- ・年齢別の利用者を見ているとほとんどが0歳、1歳で、0歳~2歳の割合が87.3%、3歳以上は12.7%ほどだった。ほとんどが育児休業中の母親で、第1子の母が半数くらいだった。父親の利用も年々増えており、育休を取得した父親の増加を実感している。
- ・コロナ禍も落ち着き、親子同士の交流が再開してきている。私たち職員は日々の利用者との関わりの中から必要に応じて 声かけを行い、利用者が気軽に安心して相談できるよう心がけている。今後も、意見や悩みにつながる小さな変化を見逃 さないよう職員間で連携を取りながら配慮していきたい。

# 宍道子育て支援センター

- ・利用制限がなくなったことから利用者が徐々に増加し、過去5年間で最も多く(親子1235組)、新型コロナウイルス感染症が流行る前の水準に戻った。また、2~3月は一日平均約7組(R5年度一日平均5組)と過去5年間の中で最も多く、午前だけで10組の親子が利用されることもあった。4月から保育所入所が決まり、人との関わりや生活リズムを整えることを目的に利用されていることが2~3月の増加要因と考えられる。また、父親の利用も増加し、R4年度の4.7倍となった。普段の利用の他、夫婦で講座やつどいに参加されることもあり、父親が育児に関心を持っている様子が伺えた。
- ・来所相談については、I人が複数の悩みを抱えているケースが目立った。子育ての悩みの他、家庭環境に関する事など 多岐に渡り、相談内容によっては保健師につなぐなど円滑に対応できるよう連携を図った。また、普段の遊びの中では、 発達に関する悩みが多かったため(特にはいはいと言葉)、遊びの広がりにつながるよう意識しながら声掛けや環境構 成を工夫し、引き続き発達を促すつどいや講座を取り入れていきたい。
- ・ここ数年、離乳食に関する悩みが増加しているため、今年度も「離乳食個別相談」を行った。参加者からは、個々の悩みを 丁寧に聞いてもらい「気持ちが楽になった」と言われる一方、食材の大きさ、固さ、味付けなど実際に調理方法を学びた いという意見も多く、これらのニーズに応えられるよう来年度は、試食や実演を交えた「離乳食体験講座」を検討する。

# 東出雲子育て支援センター

・利用制限が解除されたことと、令和5年6月に複合施設の完成に伴い移転し、開所したことで利用者が増え、併設している支所や図書館を利用したその足で立ち寄ってみる人もおり、前年より来所者が138%増加した。来所者の83%は東出雲地区で橋南地区8%、橋北地区7%、市外2%となっている。橋北地区からの利用が増加傾向にあるがこれは交通の利

便性が良いためだと考えられる。総合的に見て、様々な相乗効果により利用者の増加に繋がっていると思われる。

・相談事業に関しては前年度より477%増え、一番多い相談は「保育所(園)に関すること」であった。共働き家庭が増え、 育児休業後、順調に職場復帰ができるかどうか、保育所(園)に入れない場合はどうしたらよいか等、不安に思う保護者 が多い。また、「発達に関すること」や「大人自身の悩みに関すること」の相談もあり、相談を受ける側として、問題を解決 するだけでなく、相手の気分を軽くして充足感や安堵感が感じられるよう心がけ、寄り添う気持ちを大切にしながら対応し ていき、要支援の保護者に対しては、保護者の状況や親子関係、家庭生活等に配慮しながら保健師と連携してサポート していきたい。

# 鹿島子育て支援センター

- ・コロナの5類への移行を受け、徐々に利用者数も増え、前年比75%増の8372人となった。
- ・職員体制が整わず、木曜日、祝日に加え土曜日も閉所としていたが、体制が整い 10 月以降土曜日を開所に戻した。
- ・昨年度は 0 歳児の利用割合が一番多かったが、今年度は I 歳児が一番多く32%、0 歳児23%と大きく差が開いた。 コロナ禍での制限がなくなり、事業も再開し楽しい活動を求めて親子がつどい、賑わった。
- ・地元である鹿島町は、今年度出生数も減でこどもの数が少なくなっている現状もあるが、利用割合も 15.9%から 1.6% に減少した。鹿島支所保健師と連携を図り、声がけなどに力を入れてきたが、少子高齢化の波には勝てないようだ。今後 も、町内の親子が利用しやすい支援センターとなるよう努力を続けていきたい。一方、鹿島町に近い持田地区からの利用が 1.9%(36人)から 6.5%(213人)に増えた。住宅地が出来た事や、鹿島に近いということで保育所からの帰りに 頻繁に利用する親子があったことが考えられる。
- ・鹿島子育て支援センターの特色である中庭を生かした事業を計画し、砂あそびや水あそびを複数回実施した。O.I 歳にとって初めての経験が出来たと喜ばれた。
- ・月の半数以上遊びに来る親子も多く、あそびがマンネリ化しないよう、毎月玩具の入れ替えを行っている。今後も利用者 のニーズを把握し、遊びたくなるような環境設定に努めていきたい。
- ・「たんぽぽの日」が周知されつつあり、少人数のおしゃべり会の開催を楽しみにしてもらえるようになってきた。この会を通 して知り合い、その後の交流に繋がった親子もあり成果を感じている。
- ・鹿島子育て支援センター独自のXを開設し、お知らせや支援センターの様子などの情報発信に力を入れてきた。最新情報がいち早く届くため利用者に少しずつ浸透し、喜ばれている。

### やくも子育て支援センター

- ・コロナウイルスが5類になり、ひろばの定員がなくなったことで利用者親子は時間を気にせず、ゆっくりと遊べるようになった。また、定員がなくなったことで、父親や祖母の姿も見られるようになった。他のこどもにも声をかけて関わり合ってくれ、大人もこどももいろいろな人と会話をし、笑い合ったりして、以前より賑やかに過ごせるようになった。子育てについての情報交換をしたり、こどもたちの成長を喜び合ったりする様子もあり、時にはスタッフも間に入って利用者同士がつながるように声をかけてきた。
- ・6月からはすこのびサロン「プレママごはん&離乳食教室」に八雲町の母子保健推進委員がこどもたちの見守りで参加 してもらえるようになった。7月からは支援センターからも助産師と保育士がわいわいサロンに出かけるようにもなった。コロナ禍で中止になっていたことが、今年度は少しずつ再開することができた。事業についてはコロナ以前に戻すだけでなく、現在子育て中の父親や母親のニーズに合わせた支援の方法を検討しながら行った。
- ・はいはいをしたり、歩き始めたこどもが遊んだりするのに施設の広さがちょうど良いスペースのためか、O, I 歳児の来所が多い。令和4年度はO歳児の来所が多かったが、令和5年度は I 歳児の利用も増えたため、設置するおもちゃの内容を検討した。遊びが広がるようにおもちゃや絵本などは入れ替えをしながら設置した。初めて来所した親子も、繰り返し来所

する親子も、安心して遊んだり過ごしたりできるように配慮した。

- ・毎月行っているお話の日・野いちごタイムではスタッフが絵本の読み聞かせをしたりお誕生会をしたりしている。以前、やくも子育て支援センターを利用していた母親たちで結成された「野いちご音楽隊」の方たちが7月から野いちごタイムで演奏をしてくれるようになり、フルートやクラリネット、リコーダーなどの生の演奏も聴けるため、参加者が増えてきている。
- ・来所する親子から「豆まきがしたい!」「お散歩がしたい!」など、要望が出て、同法人内に保育園があるという特色を生かし、保育園の年長児クラスに小鬼となって出演してもらった。来所の親子にとって楽しい時間となるように、これからも季節を感じられる行事なども取り入れて、企画の幅を広げていきたい。

# 育児サロン(松江赤十字乳児院)

- ・松江赤十字乳児院内にあることから、コロナが5類に移行後も引き続き、マスク着用のお願いをしたり、食事を伴う事業 (モグモグ体験教室、プチクッキング)やプレママサロンの中止をしたりした。来所者からの相談の中で、こどもの食事に ついての悩みや質問などが多く聞かれるため、次年度は食事に関する事業の再開を目指し、実施方法を工夫したり、保護者のニーズに合わせた内容の検討をしたりする。特にモグモグ体験教室は、個別で試食をしてもらいながら乳児院の 管理栄養士や保育士に相談できるという、これまでも人気が高かった事業のため、その内容を充実し、強みの一つにして 今後周知も行っていきたい。
- ・育児サロンを知ってもらい気軽に遊びにきてもらえるよう、HPやLINEなどを活用して周知を行った。また、こどもの生活リズムによって出かけられる時間が異なり、成長するにつれて遊ぶ時間帯も変わってくるため、サロンをよく利用している方たちの声を聞き10月より開放時間を9時半~14時半に変更した。開所時間が早まったことで0~2歳の様々な年齢のこどもの利用が少しずつ増え、利用者の増加につながった。遊び場は、こどもの様子を見ながらその年齢にふさわしい玩具を提供したり、コーナーをリニューアルしたりするとリピーターの方は特に興味を持たれ喜ばれた。どんな遊びに興味があるのか、その時のこどもの姿に着目して考え、提供していく。
- ・つどいの人数制限を緩和してからは多くの申し込みがあり、乳児のつどい(ぷちぽけっと)は、定員がいっぱいになることもあった。今年度人気が高かった内容に関しては次年度実施も考え、多くの方に参加してもらえるよう開催日を増やすなどの対応も検討したい。講習会については、第一子をもつ方は夫婦での参加も数組あり、親の意識の高さが伺えた。
- ・ベビーマッサージは対面での実施も再開したが、オンラインでの希望も数件あった。自宅で気軽に受けられるというメリットがあるため、引き続き周知を行っていく。対面でのマッサージは個別で実施し、3~6カ月の乳児の申し込みが多かった。家で赤ちゃんと何をして遊んでいいのか分からないからということから来られる方もいて、家でも取り入れやすいふれあい遊びの紹介もした。
- ・相談については、離乳食の進め方や授乳についてなど食に関する内容が多かった。すぐに答えられる内容についてはその場で答えたが、実際に食事の様子を見ながら応じたいケースに関してはオンライン相談を勧めるなどして対応した。